公開講演会記録

支援することの難しさ

カラ西アフリカ農村自立協力会　村上一枝

はじめに

私にとって「支援する」ことを考えたとき、どのような方法でいつまで、どの程度の支援をするか、余分な支援もよくないし支援不足もよくない、と常に悩んでいました。

しかし、世界の最々貧国と言われる国でも人々は長い歴史を生きてきました。彼らには、彼らの意識で培ってきた生活があります。そのようなところに「貧しさからの脱却、自立した合理的な生活」に変えるような支援をすることは、正しいとは言えないと思います。その環境、意識を理解し、尊重した実践に移すべきと思いました。支援とは、そこに住む人たちの生活を活かす無償の手助けであり、人と人、心を通わせ「人の命を守ること」、それこそが私が目指す支援の方向である、と考えました。

生活の一面を垣間見て…

マリ共和国は、１９６０年に旧宗主国のフランスから独立しました。今は、首都のバマコ市にはホテルが建ち、中国製の「ジャカルタ」という多彩な塗装のバイクが走っています。国土は日本の３倍でその70％がサハラ砂漠です。20部族がそれぞれの言語を話し、異なった文化を持っています。近年の気候温暖化の影響で農産物の収穫が減少し、貧困は深まり、弱い立場の人々へしわ寄せがきています。特に教育と医療面においては、地方にはその恩恵が行き渡っていません。義務教育制度ですが、学校も十分になく、教師も不足しています。郡に小学校は４、５校、中学校、高等学校はたったの１校です。診療所も１か所です。このような

① マリの農家

状況ですから人々は十分な医療を受けることもできず、祈禱師に助けを求めています。「子どもが5歳前に死んでしまうのは、神様が連れて行ってしまうのだ」とあきらめています。日常生活で一番苦しいことは「子どもが病気になったとき」と言います。

活動の理念　支援活動の主旨

カラ西アフリカ農村自立協力会（以後カラと略）の活動は、「住民が自主的に自立した生活を自ら構築するよう努力する」、それに対する支援活動です。そのためには「マリにあるものを使い、マリの技法でマリ人が行う、必要な材料・資材はマリで購入が可能な物を使う」。これらを徹底しました。日本から物を持ち込まない。このことが大前提です。

私が単独で村に住み、生活を共にして知ったことは、女性たちの積極性と勤勉なこと、やさしさ、親切心でした。妻は夫とは別々の財産を持ち、家族の健康・栄養、子どもの教育費は母親の負担でした。ですから母親は年間を通して確実に収入を得る必要があります。一般的に農村の女性・主婦が手にするのは、雨季に生産販売する農産物からの収入だけでした。

具体的な活動内容

1．水を得る

最初に取り組んだのが井戸の設置でした。私も村に住んで水を得るのに苦労しました。

②井戸を囲んで野菜園を開設

井戸には2種類あり、一つは、井戸掘り職人による手掘りの井戸、通称浅井戸といい、地下27㍍くらいまでの掘削です。もう一つは、掘削会社に依頼して機械掘りによる手押しポンプ付きの井戸、通称深井戸です。深井戸は地下70㍍前後まで掘削し、先端に部品を取り付けて地下水脈から水をくみ上げ

ます。しかし、目に見えないところに設置する部品やその技法の確実性を確認できません。そのため信頼性の高い掘削会社を頼るしかありません。水を得られたことは、食生活の改善だけでなく、病気予防、手工芸品の製作、植林帯の造成も可能にします。井戸1本による裨益効果は、発展途上国では計り知れないと思いました。

③ コニナ村小学校林

2. 野菜栽培

これまでは、雨季に頼った野菜栽培でしたが、井戸の設置で一年中野菜栽培が可能になりました。食材が増え、気が付かないうちに栄養が改善され、余剰野菜の販売で女性たちは収入を得るようになりました。野菜園の運営管理は女性委員会が行います。女性には強い味方となりました。

④ カリテ油が原料の石鹸

3. 木を植える

村の生活に薪や木炭となる木の伐採は必要なことです。しかし、山火事や薪商人による過剰伐採で木が次第に減っているのが現状です。カラは植栽した苗木が確実に活着するよう小学校専用の「学校林」を造成しました。育苗も指導しました。雨季に植栽した苗木に、乾季になると生徒たちは水やりをしますから、非常に活着率がよいのです。育てた木（ユーカリなど）が大きくなると、建築用資材として販売し、学校の維持費に充てます。村では、5人体制で森林パトロール隊を組織し、夜間の盗伐を警戒して森林地帯を巡回するようにしました。

4. 女性適正技術の習得から女性貸付事業へと発展

女性の収入獲得の手段の一つに製作物の販売があります。その技法を「女性適正技術」で覚えます。カリテの油を原料とする石鹸の製造や、伝統的な染め物、刺繍、衣服の縫製などです。この技術を十分にいかして女性たちは収入を得られるようになりました。

委員会では、時間をかけて基本金を蓄え女性の貸付事業を開始しました。実はこの事業が提案された際、私は「自分たちで基本金を蓄えたらこれを許可する」と宣言していました。そして1年が過ぎた頃、女性委員会の代表が「村上、資金がたまったから貸付事業をしてもよいか」と許可を得に来ました。日本円で８０００円くらいだったと思います。これは女性たちが共同で懸命に蓄えた資金です。私は涙が出るほど感激したのを記憶しています。確か２０００年頃、２か村からスタートして現在は10か村以上に広がりました。利息も貸付期間も女性委員会で決めました。私とスタッフは、貸付金回収のときにときどき立ち会うだけです。女性委員会は蓄えた資金を利用して穀物製粉機を購入しました。これを使用することで女性の肉体的な負担が軽減されます。勿論使用は有料です。この製粉機の購入にも、村の女性委員会から資金の一部を出してもらいました。これは「与えられただけ」で終わらせないためです。

5．識字学習の徹底と義務教育の普及

マリ識字教育振興庁が進めている識字教室を定期的に開催しました。教室となる場所がない村には、教室を建設しました。小学校のない村では、この教室を、ある時間帯には小学校として使用しています。狭く土レンガ建築ですが、とても有効に利用されています。識字教師を育成し、村の人が仲間に教えるようにしました。女性の識字教師も誕生しました。今までは見なかったことですが、女性が人前で話をするようになったのです。

また、過去に政府が義務教育の徹底のために、村に建設させた村立の土レンガ建築の小学校が崩壊寸前の危険な状態になっていました。このような小学校を日本の外務省からの助成金で建て替えました。嬉しいことに10年以前に建設した小学校から中学校建設の申請がありました。自宅から通えるところに中学校がないと、町へ下宿させるようになる、そうなるとお金もかかり子どもが不良になる、というのが中学校建設要請の理由でもありました。もっともな話だと思いました。確実に人々が教育の重要なことを認知してきたことを知りました。

マリ政府は「村に小学校1校、パソコン1台」という政策を発表しましたが、実際は不可能でした。電気のない村にＰＣを、教師がいないのに小学校を、ということです。

6．衛生知識と病気予防の普及

識字教室で文字が読める人が多くなった頃を見計らって、公衆衛生知識の普及や季節的疾患に罹患することがないよう注意を促すため、標示板を設置しました。文字は識字教室で習うバンバラ語です。その他、村を巡回してトイレの建設、幼児の体重測定、マラ

リア予防や腸内寄生虫の駆除に薬品の投与を実施しました。村の人たちが楽しむ楽隊を呼び前座を務めてもらい、出稼ぎの若者が村に帰省する時期にエイズの予防活動も行い、エイズについての正しい知識を知ってもらいました。

⑤ 識字教室で学ぶ女性たち

7．村の女性の発展、助産師と健康普及員の誕生と「支援の成果と事業の移管」

村の女性たちが長い間、真摯に活動を続けてきた結果、食材を生産し、部族語であっても文字を書ける人が増え、収入を得る道を覚えました。適正技術によりそれぞれに適した好みの技術をいかして、収入を得ています。蓄えも個人用と委員会用に、決められた方法で蓄え、何の問題もなく順調に進んでいます。委員会ですべて相談して民主的に進めています。このような女性たちを見ていると、かなりの団結力の強さを感じます。時間的に余裕も生まれました。そのような女性たちの姿に、私はやっとマリに来る最大の目的だった医療の改善を進めていける時期が到来したのを感じました。

それは、公衆衛生や病気予防の知識を母親が学び、子どもや家族の健康を守る、という基本的な知識を持つことです。

そして、女性が安心して出産ができるよう、村出身の助産師を誕生させることです。身近な場所に産院を開設して村が管理するのです。それが実現できる時期になったということです。

やがてこれまで続けてきたいろいろな活動をカラの手から離す、つまりすべての管理を村の人たちに移行する時期がきたことを感じました。村のことは村の人たちが考え、助け合ってほしいと思いました。それに、支援する側にも限界があります。

２００８年から新しく始めた村の女性への衛生教育や病気予防普及員育成会については、村から5人の女性を選出してもらいました。彼女たちの中には文字を読めない人が多いので、教材に「絵」を使いました。例えば、家の骨組みの絵を見せて、体の骨格造りに必要な栄養の話をするのです。このようにして育成した女性たちを「村の健康普及員」として認定し、村で指導す

⑥ マラリア罹患注意の標示板

洗うときには石鹸を使いなさい」という指導で、下痢もなくなりました。非常に細かいことですが、効果を上げています。

助産師育成研修を終えた女性が新助産師として村に帰省するときに合わせて、待望の産院を開設しました。カラが建設材料を提供し、専門家を招いて村の人に建設を指導してもらいました。分娩台やベッド、器具・薬剤・薬品もそろえました。看護師については「村が給料をためて雇いなさい」と言いました。村では3か月分の給料を蓄え、男性看護師をバマコから雇用しました。運営は村の管理委員会です。経理方法も指導しました。運営費には、産院の収入だけでなく、女性団体や青年団体が共同耕作地で生産した穀物の販売収入を寄付しています。村全体に助けられ、守られている産院となりました。

この村の助産師の誕生は裨益効果が高く、「文字を覚えれば、女性も将来は職業にありつける」と気づき、その

⑦ 健康普及員が村で定例学習会開催

る体制をつくりました。過去には「予防注射をされると子どもが産めなくなる」というとんでもないデマが飛んでユニセフの予防接種を受ける人は稀でしたが、正しい知識が普及した結果100%の接種率になりました。「手を

結果、女児の就学率が男児を上回るようになりました。

女性の意識の高まりは、夫の意識も変えてきました。男尊女卑だった社会は女性を認めるようになり、家庭内暴力も減少したそうです。女性がそれまで担っていた役割を夫も負担するようになりました。家族計画のため夫婦そろって産院に行くことや、子どもの予防接種にも多忙な母親に代わって父親が付き添う姿を見るようになりました。

以前、日本の公共団体から助成金をもらう際「何年たったらマリの人々は自立できますか？」と驚くような質問を受けたことがありました。自立できるかできないかは、支援する側の問題でもあることを実体験で知りました。マリの人たちは非常に利口です。チャンスを与えて潜んでいる才能を引き出すことも我々の仕事だと思いました。ですから支援の成功、不成功は支援する側に多くの原因があると確信しました。

⑧ 新規開設の産院、助産師と看護師

自国の力で変わりゆくマリ

マリ共和国は、かつて西アフリカ諸国経済共同体に加入していましたが、2年前に脱退を表明し、2025年、正式に認められました。マリと東隣のブルキナファソ、ニジェールの2か国も脱退して3国で新しい組織・サハラ共同体をつくりました。

マリ国内政府は過去数年間、大統領も決まらず、ずっと暫間大統領が国を統治してきました。2025年6月、この大統領がこの先5年間の任期で選挙なしで大統領に任命されました。またマリのもう一つの大きな問題は、イスラム原理主義者（ジハディスト）の襲撃が数年間続き、現在も後を絶たないことです。大統領はイスラム教信者ですが、彼は国民に対しては「イスラム教だけに固執することはなく、自由に宗教を選んでもよろしい」という柔軟な考えです。しかし、イスラム原理主義者の活動を後押ししていると言われる旧宗主国のフランスは、この大統領を好ましく思っていません。ついに2年前からフランスとは断交状態になっています。そして支援先をロシアに向け、ロシアから民間軍事会社「ワグネル」がマリに入ってきてマリの軍隊の指導をしているそうですが、効果がなく、襲撃やテロの発生回数が増えるばかりです。

近年、マリ政府は多くの若者を兵士

として雇用し、たくさんの武器を購入しています。戦力が強くなったので首都のバマコへはジハディストの襲撃はないということです。しかしこの強力な軍の維持には巨額な経費が必要と思います。これまでヨーロッパの国々から受けていた支援が断ち切られて、今は湾岸諸国から支援があります。

マリのスタッフに聞きますと、この費用（軍の維持費）はマリの税金で賄っていると言います。

マリの一番の収入は家畜を近隣の国に売ること、アフリカ第二の生産高であるコットン（綿花）の輸出です。加えて西側のギニア国境辺りの金（ゴールド）の産出。さらに近年は私がかつて一人でボランティアをしていた村の近くでリチウム鉱山が見つかりました。そのため、村の若者たちがそちらに出稼ぎに行き、村の若い力が減少するという状況になりました。

また、これまでは課税の対象でなかったものにも課税されるようになり、身近なものでは電話カードや国内での送金時に税金がかかるようになりました。鉱山の産出物からのマリの収益は、過去は20％でしたが、新大統領になり35％まで引き上がったということです。国自体が自国で賄えるようになることは非常によいことだと思いますが、国民が課税に耐えかねてクーデターを起こさなければいいと思います。新大統領は、国民のためにいろいろな事業を実施しています。例えば、学校建設と整備、病院建設（15か所）、保健センターや病院へのソーラーパネルの設置、井戸の掘削、食料の支援などを行っています。しかし、今現在、1日6時間の停電が続き、物価が高騰しています。２０２５年９月にはセネガルの首都ダカールとマリのバマコ間、そしてアビジャンとバマコ間の道路がジハディストの襲撃を受けて遮断されてしまったので、燃料が入ってきませんでした。一度はニジェールの軍隊が警備をし、82台のタンクローリーで燃料が運ばれましたが、現在も燃料不足が続いています。

私たちの活動地域もイスラム過激派、アルカイダの一部がサハラ砂漠から南下してきて村に入り込み、大変な被害を被っています。日本のＯＤＡで建設した小学校も襲撃されました。いつ解決に向かうのか、「神のみぞ知る」ということです。

これまでカラが支援し、村人の努力が実り、多くの成果を上げてきた事業が、この先はどうなるか、非常に不安です。視察に行くこともできません。しかし、このような状況下でも産院・診療所は機能し、野菜栽培も実施されています。生きる道は閉ざされていません。

穏やかな状況に戻るのを祈るだけです。

（２０２５年12月18日・公開講演会）

筆者略歴（むらかみ・かずえ）

日本歯科大学卒業。歯科医師。日本歯科大学名誉博士。

著書『悩んでも迷っても道はひとつ―マリ共和国の女性たちと共に生きた自立活動三〇年の軌跡』（２０２４年、小学館）。